HIGASHIOSAKA CENTRAL ROTARY CLUB

（第2660地区）　WEEKLY BULLETIN　No. 43

東大阪中央ロータリークラブ

創　立　昭和47年2月20日
例 会 日　毎週月曜日　12:30～
例会場所　シェラトン都ホテル大阪
事 務 所　大阪市天王寺区筆ヶ崎町5-38
〒543-0027　ロイヤルパークス桃坂1112号
TEL. 06(6772)2320
FAX. 06(6772)2327
E-mail:hcrc@at.wakwak.com

会　長　切石博之
会長エレクト　浅野光男
副会長　宮崎康治
幹　事　細川勝治
会報委員長　岡田忠彦

BUILDING COMMUNITIES BRIDGING CONTINENTS

地域を育み大陸をつなぐ

2010～2011年度　国際ロータリー会長　**レイ・クリンギンスミス**

第 1814 例会　平成 23 年 6 月 20 日（月曜日）　第 43 号

本日の例会　6月20日（月）第3例会

◎ソング　「四つのテスト」
「会長年度末挨拶」
切石博之会長

◎本日の献立　ブッフェ

◎6月27日（月）定款による特別休会

次回の例会　7月4日（月）第1例会

「会長挨拶並びに新年度方針説明」
会　長　浅野光男
会長ノミニー
副会長（クラブ奉仕委員長）
幹　事　小川高弘

◎本日の献立　寿司盛り合わせ

前回の例会記録　6月13日（月）第2例会

◎ビジター　大阪東RC　野村良男氏

会長挨拶　会長　切石博之

今日13日を含めて、本年度も残り2回の例会となりました。ぼちぼち、ホッと気楽になりたいところでありますが、諸問題がまだあり、なかなか息を抜けないようであります。

さて、本日の卓話は、大川真一郎様をお招きして「私とクラリネット」の題でお話頂く予定であります。クラリネットの演奏もあるのかと期待しているところであります。

私も音楽を聴くのは好きで、日曜日はいつも「題名のない音楽会」を見ています。昨日と先週は－小澤征爾－以来の日本人によるベルリンフィルを指揮する－佐渡裕－の演奏に耳を傾けていました。

また、午後からはトニー賞の発表の絡みでいろいろなミュージカルのダイジェスト番組もありました。「マイフェアレディ」「王様と私」「ラ・マンチャの男」「オペラ座の怪人」「エリザベート」「美女と野獣」「ウエストサイド物語」「ミス・サイゴン」等々の素晴らしい曲の数々を聴いて楽しんでいました。

今日の大川様のお話も楽しみにさせて頂いております。

幹事報告　幹事　細川勝治

1．今年度、各委員委員長には活動報告書の提出をお願いいたします。
2．次週、6月20日(月)は本年度最終例会となります。全員参加でお願いいたします。

出席報告　岡田委員

本日の会員数	３９名
本日の出席者数	３２名
本日の出席規定適用免除会員	１３名
本日の出席率	８８．８９％
5月30日の修正出席率	７４．２９％

ＳＡＡニコニコ箱報告　　大石ＳＡＡ

切石会長　皆様のお蔭です。もうひと頑張り。

鈴木会員　バッチ忘れです。

松岡会員　前回の欠席のお詫びと、役員の皆様、後少しです。頑張って下さい。

卓　話　　「私とクラリネット」

大東ロータリークラブ　大川進一郎

ロータリアンで結成している、ベリーグッドマンズ楽団のメンバーでもあります大川です。大学時代からクラリネットを始めましたが、後にクラリネットが命の恩人となりました。卒業後、サンヨー電機に就職しましたが、本家の後嗣となって呉服屋と衣料スーパーを引き継ぎました。１億５千万円の相続税を支払う為に始めたボウリング事業に15億円の借金をし、月々３千万円の返済ができず死をも覚悟した時、クラリネットを取り出し、一心に吹いていると不思議な事に、再建の為のアイデアが次々と思い浮かび、危機を脱しました。昨年10月５日に京阪百貨店を核とした100の専門店のあるショッピングセンターをオープンし、１Ｆのアトリウムをプラザフェスタと名づけ、オペラやジャズ等の演奏を提供し、お客様に喜ばれています。次の夢はオペラハウスを建設することです。今年はクラリネットデビュー55周年です。更に60周年へと向けて精進いたします。

「ロータリー財団のはじまり」

1917年６月17～21日、アメリカ・ジョージア州アトランタで開催された国際ロータリークラブ連合会の年次大会は、その後のロータリーの行方を変える大きな一歩となりました。

この大会で、前年の７月に会長に就任したアーチ・クランフは、「さまざまな社会奉仕を今まで通り続けていこうと思うなら、世界で善をなすための寄付金を受け取ることは極めて適切なことだと思われる」と述べ、新しい基金の創設を提案しました。

彼の提案は、同大会で採択されました。ロータリー基金(ロータリー財団の前進)への最初の寄付は、ミズーリ州カンザスシティーロータリークラブからの、26ドル50セントでした。

しかし、今日多くの成果を挙げているロータリー財団が、最初から順風満帆だったわけではありません。６年たっても基金の残高は700ドルにすぎませんでした。その後1929年に始まった世界大恐慌、1939年からの第２次世界大戦と、ロータリー財団には試練の日々が続きました。

1947年１月27日、ロータリーの創始者ポール・ハリスが亡くなりましたが、このことがロータリー財団の転機になりました。「ロータリアン必携」(1995年)には、

> ポールの逝去で、寄付が国際ロータリーに相次いで寄せられるようになりました。財団はポール・ハリス記念基金を設け、ポールに敬意を表したいロータリアンに対して、財団強化のために寄付するよう要請しました。その反響は素晴らしいものでした。翌年の７月までに、米貨130万ドル以上が寄付され、永年の目標である200万ドルの寄付が射程距離に入ってきました。
>
> 1947年には最初の財団プログラムが実現されました。それは、高等研究奨学金と呼ばれるもので、１年目は、米国、ベルギー、英国、フランス、メキシコ、中国の18人の若い人たちが選ばれ、他国でそれぞれの専門分野を勉学しました。当時は、この人たちはポール・ハリス・フエローと呼ばれていましたが、最初の国際親善奨学生でした。

とあります。その後、教育プログラムに、人道的プログラムに、このロータリー財団は貢献しています。また『奉仕の一世紀』は「希望の財団」の項を

> ロータリー財団が、これほど効果的なのは、資金と人を組み合わせるからである。アーチ・クランフはこのように述べている。
>
> 「金だけでは、大したことはできない。
> 個人の奉仕は、金がなければ無力である。
> この２つが組み合わされば、文明への天の恵みとなることができる」
>
> ポール・ハリスは1934年にクランフに出した手紙にこう書いている。「私たちは、あなたがこの運動に何年も注いできた努力以外に、おそらくこれといった努力をすることなく、いつか、突然、自分たちが何か非常に重要なものになっているのに気づくような気がする。」
>
> ロータリー財団への支援が世界的ではなかったときに書かれたこの言葉は、先見的であった。クランフは1951年に亡くなったが、彼が大事にしたロータリー財団はすでに確かな現実になり始めていた。しかし、自分のビジョンについて最も楽観的だった日のアーチ・クランフ自身でさえ、「小さなひらめき」と彼が呼んだアイディアがこれほどの力を持つと想像したであろうか？

という言葉で締めくくっています。

『友』編集長　二神　典子

［ロータリーの友６月号より］